



タイ里親運動15周年〜若竹寮の歩みと、私たちにできること〜

熊本YMCAは1994年より、タイのチェンライYMCAと協力し、北部タイに暮らす山岳少数民族の子どもたちを支援する里親運動に取り組んでいます。里親運動15周年を機に、2008年10月より1年間に子どもたちが共同生活を送る「若竹寮」から2名が熊本へ来て、日本語を学びながら、日本文化や習慣について理解を深めています。

今回は、タイ里親運動の歩みを振り返るとともに、若竹寮の課題と支援のあり方について考えます。

子どもたちに教育の場を

タイ・ラオス・ミャンマーの3国が隣接する山岳地帯に暮らす少数民族。彼らは長い間、タイ人との文化や習慣の違いなどから強い差別や偏見にさらされてきました。そのため十分な教育や医療を受けることができず、住居や農地を失った人々は、麻薬や売春に手を染めるなど様々な課題を抱えています。そのような環境にある子どもたちに教育の場を提供しようとして行われてきたのが、熊本YMCAの里親運動です。



北部タイ山岳少数民族の子どもたち(写真はアカ族の村)

1993年、熊本YMCAのスタッフが行ったワークキャンプの下見で現地を訪れたのをきっかけに、日本の

他の団体が支援を行っていた施設を引き継ぐ形で若竹寮はスタート。運営にあたって、現地YMCAスタッフとも様々な議論が交わされました。「子どもたちの自立を促す支援は難しいのではない」「海外からの支援は一時的な経済援助だけで終わる場合が多い」という声もある中、若竹寮で過ごした子どもたちのうち一人でも「将来、自分のコミュニティのために働きたい」と思ってくれば、また、このプロジェクトを通して私たち日本人がタイから学ぶことも多くあるのではないかと考えて、寮の運営を開始。子どもたちがすくすくとまっすぐに育つようにとの願いを込め、若竹寮と名付けられました。経済的な支援を行う日本の里親の協力により、小学生から大学生までの55名の子どもたちが寮で共同生活をしながら、将来の夢に向かって勉強しています。

あなたにできること

里親になる
子ども一人の生活費用を負担すると、里子が紹介されプロフィールや手紙が送られてくる

訪問する
ワークキャンプやスタディツアーに参加すると、直接現地の生活を知ることができる

寄付する
個人・団体からの寄付が、子どもたちが共同生活を送る若竹寮の運営資金として役立てられる

買う
子どもたちがつくった手工芸品を購入すると、売上が彼らの教育や自立のために役立てられる

ボランティアする
手工芸品の販売や子どもたちから送られる手紙の翻訳として協力できる

若竹寮



支え合い楽しみながら生活を送る若竹寮の子どもたち

若竹寮の現状

これまでに175名の子どもたちが若竹寮を巣立っていききました。皆寮で過ごした日々を糧に、卒業後はそれぞれの場所で活躍しています。彼らがいづか、自らのコミュニティを支えるリーダーとなることが期待されています。若竹寮は建設から20年弱が経過し、建物の老朽化がかなり進んでいます。さらに、現地の経済情勢も以前に比べ厳しさを増しています。そして、依然として入寮を希望する子どもたちが後を絶たない状況も続いています。

私たちにできること

現在も、北部タイ山岳民族の子どもたちを支える里親が日本各地にいます。四季折々に届く手紙やクリスマスカードによって、遠く離れて暮らす若竹寮生の成長を知ることができ、協力方法は里親としての支援に限りません。現地を訪れ実際に現状を見ること、山岳民族の人々が手芸を施した手工芸品を購入すること、また、その販売にボランティアとして協力すること(手工芸品の売上は、山岳民族の子どもたちの教育や若竹寮の運営資金として役立てられる)。そして、タイから送られてくる英語の手紙を日本語に翻訳するボランティアのように、熊本や日本にしながらできることも多くあります。タイの抱える課題を知り、自らができることは何かを考えることが支援の第一歩です。

熊本YMCAでも、若竹寮の卒業生が集う同窓会を企画、ボランティアスタッフを派遣し、より詳細な調査を行うなど、新たな展開を検討しています。熊本YMCAタイ里親運動は、多くの人たちに支えられ15周年を迎えることができました。「人のために生きる社会の実現」へ向け、タイの人々と手を携えながら、これからも歩みを進めていきます。

わたしと聖句

詩篇第139篇14節

わたしはあなたに感謝をささげます。わたしは恐ろしい力によって驚くべきものに造り上げられている。御業がどんなに驚くべきものかわたしの魂はよく知っている。

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団 希望ヶ丘教会

本堀 秀一

「味わい深い人生」

この原稿を書いているのは、7月ですが、この時期になると教会の裏手にある田んぼの蛙がいつせいに鳴きだします。田植えが終わった田んぼの水面は、鏡のように周囲の景色を映し出して、とてもきれいです。もともとも近頃は田んぼを見ても、田植えの光景にお目にかかることは少なくなりました。一台の田植え機がアツという間に田植えを済ませてしまうのでしよう。人の姿がない田んぼの光景も味気ないですが、これも時代の趨勢でしょうか。お米の味は変わりませんが、「あじわい」は少しずつ変わってきているようですよ。子どもの頃、ご飯を一粒でもお茶碗に残すと、よく叱られました。お米が作られる過程や大変さを、日々見ていましたから、その大切さもわかるわけです。人がいない田んぼでは、それを望むのも難しくなりました。ところで、あなたは自分がどのように造られたかご存じですか。自分がどんなに素晴らしい造られた存在であるか、それがわかるならば、もっともっとその味がわかるはずですよ。その意味でお米も人間も同じかもしれませぬ。神様に感謝しながら、あらためて自分自身を味わってみてはどうでしょうか。「私の目にはあなたは値高く、貴く、わたしはあなたを愛し…」(イザヤ43:4)